

1	食品交換表にしめされる目安量は、食品の廃棄部分も含めた全体の生重量である。	×	交換表における目安量は破棄部分を除いた正味重量で、食品の生重量である。P135 右 24 行目参照。
2	基礎カーボカウントで、ある一食でゆでうどん 1 玉に副菜をバランスのよい単位配分で摂取するとしたとき、糖質量はだいたい 70g 前後と計算する。	○	ゆでうどん 1 玉では総重量の約 20%を糖質量と考えるので、約 48g。栄養バランスのよい副菜の糖質量はだいたい 1 日量 60g 前後になるので、一食分としては約 20g で計算する。計 68g ÷ 70g、となる。P138 参照。
3	GLP-1 作動薬は、血糖上昇時のみ β 細胞からのインスリン分泌を促進し、 α 細胞からのグルカゴン分泌を抑制する。	○	問題文の通り。P177 左参照。
4	脂質異常是正のための食事療法において、ふやすべきは多価不飽和脂肪酸、なかでも n-3 系であり、へらすべきものはトランス脂肪酸である。	○	問題文の通り。P143 左参照。
5	インスリンボール(注射部位やその周辺におこる皮膚腫大)では、進行すると注射時の痛みがひどくなる。	×	逆に注射時の痛みがなくなるため、ますますその部位に注射するようになって、血糖不安定の原因になる。P188 左 G②a 参照。
6	PWV(脈波伝播速度)検査では、値が低いほど動脈硬化は進行している。	×	一般に「波」は、それを伝える媒体が硬いほど速く伝わる。空気振動の波である「音」は、大気中よりも線路の鉄ののほうが速く伝播する。つまり PWV の値が大きい＝脈波・拍動の伝わり方が速いほうが動脈硬化が強い。
7	適切な運動は、直接その時の血糖を下げるだけでなく、筋肉における GLUT4 を増加させるなどにより、持続的な血糖改善作用がある。	○	問題文の通り。P155 右 B 参照。
8	随時血糖 310mg/dl で尿ケトン 2+ であるような患者の場合、早急に血糖を下げる必要があるので、インスリンを使用しつつ運動療法を徹底する。	×	血糖 300mg/dl 以上、尿ケトン陽性など、インスリン依存状態にあるような患者では、運動によってさらに血糖値・血中ケトン体が上昇するので、運動は禁忌である。P160 左、6.A 参照。
9	CGM システム機器における血糖測定値は、皮下間質液中の血糖値であり、静脈血血糖の変動より 5 分～15 分程度遅れて変化する。	○	問題文の通り。P208 右一行目参照。